

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第56回

森の彫刻家 上床利秋

鹿児島出身の大関といえ

7年ぶりに7月場所ので鹿児島県出身力士の明生関が大相撲小結に昇進したという大きな記事が南日本新聞に掲載された。その日の関連記事は3頁に及び、地元奄美大島瀬戸内町での喜びが大きく伝えられた。県内の大相撲出身力士が活躍するとやはりうれしい。その場所の小結の座で明星関は無事に勝ち越すことが出来た。これからの昇進も夢ではない。しばらく遠ざかっていた大相撲がまた楽しみになってきた。

大相撲といえは約40年前、郷土出身力士二人が大相撲で大関として活躍していた時代があった。鹿児島県民は老若男女問わず誰もがテレビ

の前で一丸となって二人を応援していた。それが霧島関と若嶋津関である。とすぐに答えられるのは50歳代以上の人たちだろう。

霧島関は努力の人であった。特に、入幕してからは徹底した本格的筋力トレーニングで、体重を110キロから130キロに増量させ、肉體改造の効果を実証し、大関に昇進した。和製ヘラクレスという異名を持つ。当時開催されたパリ場所でも特に女性からの人気が高かったのもうなずける。得意技は左四つ、吊り、出し投げで、巨漢ライバルの小錦も投げ飛ばしたことがある。現役時代、「踏まれた麦は強くなる」という本を書き、世界中に国技大相撲の理解を広めた貢献は大

きい。フランスのシラク元大統領も感動し、霧島関に親書が届いたというエピソードが残されている。現在の霧島市牧園町出身。

若嶋津関は霧島関と同世代で、今でも仲が良いと聞く。種子島中種子町出身で南海の黒ヒヨウとして異名を誇った。当時の流行歌「硝子坂」で人気のあった穎娃町出身の高田みづえさんと結婚したことで話題になった。日本中がめでたい空気に包まれた。千代の富士の連勝を阻んだ名勝負も語り草になっている。笑顔の似合う花のある力士であった。当時種子屋久航路で運航していた定期船わかさ丸は18時に鹿児島港に入港していたが、当時の客は皆、テレビ観戦に夢中で二人の勝敗が決するまでは船を降りようとしない人がいなかったほ

どである。

現代はインターネットで様々な情報が入るけれども、それゆえに若い人たちは新聞を読まず、テレビも見ない。昔ほど大相撲に興味を持つ人は少なくなっている。

昭和時代の鹿児島県霧島市や種子島の名声を一挙に上げてくれた両大関の功績は大きい。その熱狂を今に伝えることは難しい。当時の大関二人の大活躍を知る人は徐々に減っていくのだろうか。

日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

御感想をお寄せ下さい。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索



バックナンバーも読むことができます。



「現役時代の霧島一博関」 筆者作 パステル



「稽古中の若嶋津六夫関」 筆者作 鉛筆

レモン画材絵画教室 ご案内

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩 教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室
②13:30～
- 月1回 第2火曜 10:00～
和紙ちぎり絵教室



お申し込みはTEL 0995-45-1015
国分進行堂・レモン画材まで